

朝河貫一『明治小史』¹ ——その3、日露戦争とその帰結（1904～1910）

矢 吹 晋 訳

第6章 日露戦争とその帰結 1904～1910

日露戦争における最初の敵対行為は10年前の日清戦争当時と同じように、交戦国のいずれかの支配者が正式な宣戦布告の前に行ったものであり、1904年のそれは1894年当時よりも決定的であった。外交関係が断ち切られるやいなや、ロシア軍は韓国との境界を越えて、半島の帝国に入った。日本人はもっと活発だった。ロシア艦隊（主力の7隻の戦艦と数隻の巡洋艦からなる主な支隊は旅順港近くにあった）がウラジオストク、済物浦、上海間で分割されたのを知り、東郷[平八郎]提督は[1904年]2月7日、護衛された6隻の戦艦と10隻の船隊を率いて、外交決裂後の30時間以内に佐世保から直接、旅順港に向かって巡洋艦を護衛した。釜山沖でロシアの商船を捕らえ、艦隊は木浦に集合した。瓜生[外吉]海軍中将の指揮で巡洋艦の小艦隊は、韓国の港に上陸する何千人もの日本人の軍人を運びながら輸送を護るために済物浦に派遣されたが、艦隊の残りは旅順港に向かって進んだ。済物浦にはロシアの巡洋艦コレーツ Korietz と砲艦ワリヤグ Variag [6000トン]のほか、日本巡洋艦千代田 [2439トン]と同じく、イギリス船、フランス船、アメリカ船、およびイタリアの戦艦が停泊していた。2月7日夜、巡洋艦千代田は気づかれずに港から出て、瓜生支隊に加わった（瓜生支隊は8日午後に済物浦に姿を現した）。コレーツはおそらくは旅順港に行こうとしたが、日本の水雷艇に遭遇したので、それ

¹ 訳者による訳注は「……」で示した。朝河貫一による原注は（……）で示した。挿入した図表は、すべて英文版のものをそのまま用いた。

らに発砲して港に戻った。3隻の日本巡洋艦と数隻の輸送船がコレーツを追走し、ロシア艦隊の射程距離まで近づき、9日朝に日本の兵士が輸送船から上陸するまで停泊した。そこで瓜生からコレーツにメッセージが送られた。曰く、ロシア船が正午以前に港から離れなければ、瓜生支隊は実力行使せざるをえない、と。港の中の中立船の指揮官は、中立と見なされている港湾内での敵対行為への抗議に同意したであろう。ただし、ロシア船は日本の要求を快く受け入れて船首を外へ向けようとはしなかった。ワリヤグは砲戦で大きな損害を受け、堂々たるコレーツによって保護されつつ、辛うじて港に戻った。砲火はワリヤグの弾薬庫に命中し、ひどい爆発を起こしていたので、まもなく沈没した。輸送船スングリは穴をあけられて沈没し、コレーツも（敵側による逆利用を避けるために）ロシア人によって燃やされ、沈んだ。

日本の支隊は損傷を受けなかった。韓国に対する軍事的支配をめぐるこの交戦で、日本の力が実際に確信された。瓜生支隊が済物浦に送られた後、日本艦隊の主力部分は旅順港に向かってその船旅を続けた。8日朝、海は静かで、温度は常になく穏やかであった。午後遅くに、艦隊は芝罘に向かったが、魚雷小艦隊は旅順港と大連に送られた。ロシア艦隊（まだ旅順港外にあった）は、真夜中にかけての突然の魚雷攻撃に驚いた（それは600米まで近づいていた）。ロシア側からの反撃は、ほとんど効果を与えなかっただけでなく、味方の戦艦レトウィザン Retvizan [1.27万トン]、ツェザレヴィッチ Cesarevich [1.29万トン] および巡洋艦パルラダ [6600トン] に重大な打撃を負わせる始末であった。日本の主力小艦隊は9日朝、旅順港に対して総攻撃をかけたが、彼らは午前10時までは水雷艇の成功を知らされなかった。ロシア艦隊が済物浦を発っていないことさえ知らなかった。正午に東郷中将は旗艦三笠から艦隊に合図した。「勝敗の決定はこの戦闘にかかっている。皆で最善を尽くそう」。戦闘は日中1時間近く続いた。そこでもロシアの砲撃はあまり効果的ではなく、日本の砲弾は既に破損していたレトウィザンに打撃を与え、戦艦ポルタワ Poltava [1.1万トン] と

巡洋艦ディアナDiana [6600トン]、アスコリドAskold [5900トン]、およびノーヴィクNovik [3000トン] を損傷させた。損傷箇所はすべて喫水線の下であった。これは日本がまもなく得た黄海の完全な支配の始まりだった。翌10日、両国の天皇と皇帝は、両者間の戦争の存在を宣言した。ロシアの宣言書は以下の通りである。

我々はすべての忠実な臣民に宣言する。我々の心に親愛な平和の保持への懸念があるので、極東の平安を確保するためにあらゆる努力を払うことを。これらの平和目的のために、韓国の事柄に関して2つの帝国間に存在する協定の改正を日本政府が提案したので、これに同意することを宣言する。しかしながら、この主題をめぐる開始される交渉は、結論をもたらさなかった。そして、日本はわれわれの最終回答とわが政府の提案の到着を待たずに、交渉およびロシアとの外交関係の断絶を通告してきた。そのような関係の断絶を事前に通告しないことは、戦争行為の始まりを含意する。日本政府は旅順港要塞の外側に停泊していた我々の支隊に対して水雷艇による奇襲攻撃を命じた。この問題に対する我が総督の報告に接して、我々は直ちに日本の挑戦に武力で応ずるよう命じた。「我々の決意を宣言するとともに、神佑を得て揺るがぬ信念のもとに、父祖の国を守る忠実な臣民の一致した準備を固く信じつつ、わが陸軍と海軍の栄光に神の恵みあれ。

日本天皇の詔勅は、戦争の正式な宣言だった。1894年に中国との戦争の始めに出された類似の文書²と比較しつつ、「露国ニ対スル宣戦ノ詔勅」³を

² 日清戦争の章で紹介済みの「清国ニ対スル宣戦ノ詔勅」を参照。

³ 露国ニ対スル宣戦ノ詔勅。天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス。朕茲ニ露國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜ク全力ヲ極メテ露國ト交戦ノ事ニ從フヘク朕カ百僚有司ハ宜ク各々其ノ職務ニ率ヒ其ノ權能ニ應シテ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ遺算ナカラムコトヲ期セヨ。惟フニ文明ヲ平和ニ求メ

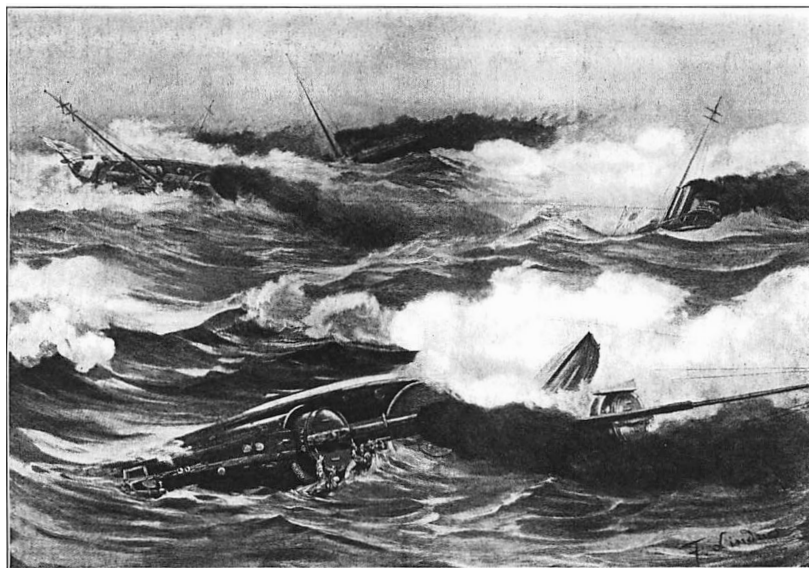
読むのがよい。その大意は以下のごとくである。

天の恩寵により、日本天皇は太古から万世一系の皇室を仰いできたが、ここに忠実な勇敢な臣民に宣言する。我々はここにロシアに宣戦を布告する。我々は、ロシアとの戦争を遂行するために、すべての力で戦うよう陸軍と海軍に命じた。すべての官僚も努力して軍隊と協力して国家目的を達成すること、国家の法律の範囲内ですべての手段を用いて戦うよう命ずる。我が文明帝国の平和な進歩を促し、他の国家との友好関係を強化し、それによって東洋における永久の平和を確立し、他の国の利害を傷つけることなしに我が帝国の将来の安全を確保することは、国際関係において根本的必要であり、我々の目的であると考え。すべての他国との関係が真に着実に成長するよう、我が官僚はその意志に服従して義務を実行するであろう。不幸にしてロシアと開戦するに至ったのは、このように、我々の願望にまったく反して

列國ト友誼ヲ篤クシテ以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ各國ノ權利利益ヲ損傷セスシテ永ク帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スヘキ事態ヲ確立スルハ朕夙ニ以テ國交ノ要義ト爲シ旦暮敢テ違ハサラムコトヲ期ス朕カ有司モ亦能ク朕カ意ヲ體シテ事ニ從ヒ列國トノ關係年ヲ逐フテ益々親厚ニ赴クヲ見ル今不幸ニシテ露國ト豐端ヲ開クニ至ル豈朕カ志ナラムヤ。帝國ノ重ヲ韓國ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是レ兩國累世ノ關係ニ因ルノミナラス韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所タレハナリ然ルニ露國ハ其ノ清國トノ明約及列國ニ對スル累次ノ宣言ニ拘ハラス依然滿洲ニ占據シ益々其ノ地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併呑セムトス若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸セン乎韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス故ニ朕ハ此ノ機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恆久ニ維持セムコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歳ノ久シキニ互リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曠日彌久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス凡ソ露國カ始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナシ露國ハ既ニ帝國ノ提議ヲ容レス韓國ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ帝國ノ國利ハ將ニ侵迫セラレムトス事既ニ茲ニ至ル帝國カ平和ノ交渉ニ依リ求メムシタル將來ノ保障ハ今日之ヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ナルニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス。

のことである。韓国の統合は我が帝国にとって重大な関心事であった。両国の伝統的な関係によるばかりではなく、韓国の分裂はわが帝国の安全にとって欠くべからざるものであるからだ。にもかかわらずロシアは、中国に対する条約で明白に述べ、列強に繰り返し保証したにもかかわらず、なお満洲を占領し、それを固め、強化し、最終的な併合に熱中している。ロシアは満洲の領有以後、韓国の統合を保持することが不可能になり、極東の平和維持の希望を放棄するよう迫られた。この環境下で我々は交渉により問題を解決し、恒久平和を確保することを期待されている。この目的に鑑みて、我が官僚は命を受けてロシアに提案し、昨年後半に会議を頻繁に行った。しかしながら、ロシアはその提案に調停の精神で応えず、懸案の解決を引き延ばすのみである。一方では平和について表面上提唱して、もう一方で秘かに海軍の軍事的準備を展開して、我々の黙認を得ようとしている。ロシアに平和に関する心からの願望があると認めるのは全く不可能である。我が帝国の提案をロシアは拒絶し、韓国の安全は危機に瀕している。我が帝国の利益は脅威にさらされている。この危機に際して、平和的交渉によって帝国が確保しようと努めてきた将来への保証は、いまや武力に訴えることによってのみ、求めることができる。我が忠実な臣民の忠誠と武勇によって、恒久平和が回復され、帝国の栄光が保持されることは、われわれの熱望するところである。

日本の駆逐艦による夜襲は、戦争初期の2カ月の間に何度か繰り返され、ロシア駆逐艦と砲艦にいくらかの損害を与えることに成功した。日本軍はまた、2月23～24日、3月21～22日、および5月2～3日の3回にわたり、石を積載した2、3隻の老朽汽船を港の入り口に沈めて、出入りを妨げようと企てた。ロシアのサーチライトの光と、沿岸の砲台および戦艦からの砲撃を受け、これらの英雄的企ては完全には成功せず、満潮時に大きな船が航行する海路はまだ残っていた。



JAPANESE TORPEDO BOATS NEARING PORT ARTHUR TO ATTACK THE UNSUSPECTING RUSSIAN FLEET AT ANCHOR
IN THE OUTER PORT
Painting by F. Lindner

画1 旅順外港に碇泊するロシア艦隊を日本の魚雷艇が密かに接近して攻撃、F. Lindner描く

しかしながら、日本の間接的な攻撃と機雷の敷設はより大きな成功を収めた。前者は港湾内のロシア戦艦に損害を与えた。港湾内では遅れて到着した海軍中将マカロフ Makarov の手際のよい指揮によって勇気と自信が小艦隊を奮い立たせ始めていたのだが、2、3の船とともに湾外に出て、反撃に出た。勇敢なマカロフがいつも動き回る地点に日本は機雷を敷設した。4月13日朝、マカロフの7隻の船隊は突然、別の日本分遣隊に遭遇したが、そのなかには旗艦ペテロパブロフスク Peteropavlovsk [1.1万吨] も含まれていた。そのとき日本の包囲船は湾外15マイルの地点におり、ロシア船を追跡したので、ロシア艦隊は湾内に後退しようとして、午前10時32分にペテロパブロフスクが機雷に触れ、すさまじい爆発の後、転覆して直ちに沈んだ。マカロフと600人の兵士は画家ヴェレシチャーギン

Vereshchagin⁴とともに沈んだが、キリル大公Grand Duke Cyril [アレクサンドル2世の孫で、ニコライ2世の従兄弟]は救われた。5月15日、巡洋艦吉野が衝突し、戦艦初瀬はロシアの機雷に2回触れて失われた。戦争の全期間内に敵軍の機雷攻撃によって沈められた日本船には、戦艦屋島、巡洋艦高砂、鎮遠、宮古などの駆逐艦および砲艦が含まれる。

4月13日の惨事後、ロシア船は大部隊で湾外に繰り出すことはほとんどなくなった。しかしながら、旅順港の陸上要塞が陥落する前にバルチック艦隊が到着できなかった場合、旅順港が陸上からの攻撃にさらされるのは必至なので、ロシア小艦隊は6月23日と8月10日の2回、包囲線を突破して、ウラジオストク支隊との合流を試みるという絶望的な企てを行った。6月のときはウラジオストク艦隊が遠征を始めたところで、1400人の兵士を載せた日本輸送船3隻を雷撃した。堂々とした巡洋艦ノーヴィクに率いられた旅順港の全艦隊は朝、満潮で出撃したが、夕刻になると日本船と遭遇した。しかも、そのときの潮位は大きな船が入港できないほどの低さであった。そこで、ロシア船は停泊し、沿岸の砲台に保護されて一夜を過ごした。東郷海軍大將は夜襲の命令を水雷艇と駆逐艦に与えた。彼が後に政府に報告したところによると、「疾風のように突進した」。敵の砲弾による水しぶきを縫って、小さな水雷艇はロシア艦船の狭い前部に対して攻撃を繰り返した。翌朝、戦艦ベレスエート [1.27万トン] が消えており、他の2隻の船が港内に牽引されるのが見られた。8月10日の出撃はもっと破れかぶれであり、ロシア軍にとってははるかに大きな惨事となった。海軍少将ヴィットヘフトWitthoeftが6隻の戦艦と3隻の護衛された巡洋艦を率いて南方へ急いだが、海は風いでおり、正午までに港から30マイル地点だった。1時少し過ぎに最初の手ごわい戦闘が始まり、そこでは近代的に武装された力は伯仲していた。戦いは数時間後に繰り返され、どの場でもロシア側は、

⁴ ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・ヴェレシチャーギンはロシアの従軍画家。ロシア帝国の中央アジア征服や露土戦争に従軍して戦場をテーマとした作品を数多く残す。日露戦争で取材のため乗っていた戦艦が沈没し、死去。

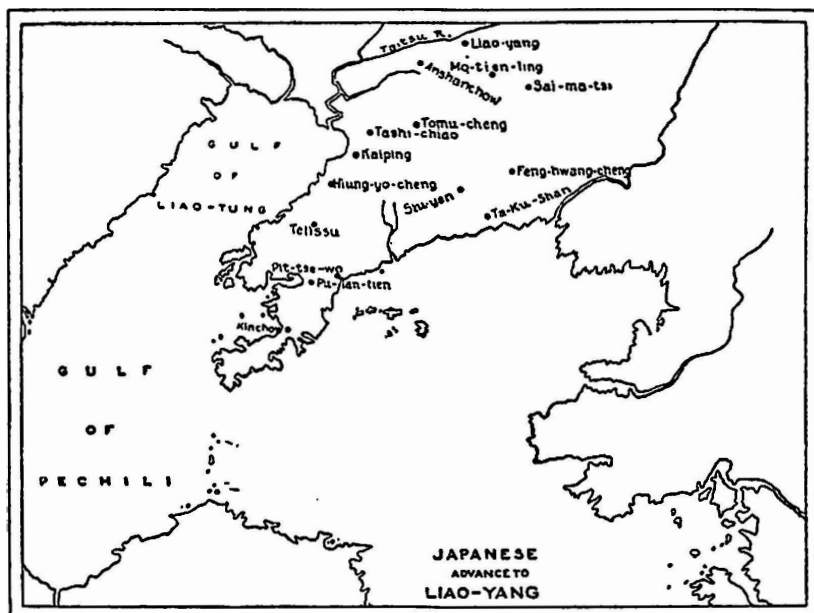
優れた砲術と非常な爆発力をもつ火薬によって支えられた日本側の8インチ砲からの重い砲弾に悩まされた。午後6時40分、旗艦ツェザレヴィッチ *Cesarevich* はその舵機を失い、指揮中のヴィットヘフト少将は戦死した。そこで、ロシア艦隊は命令と行動の統一性を失い、異なる3方向からの、日本軍の縮み上がらせるような砲撃のもとで完全に敗北し、散り散りになった。旗艦と2隻の巡洋艦は強打された状態で青島についた。後者の一つ、ノーヴィクは後にサハリン沖で発見されたが、上村〔彦之丞〕中将の小艦隊によって沈められ、他の一つ、アスコルド *Askol'd* と砲艦は上海にたどり着いた。ルイシテルニ *Ryeshitelni* は芝罘に到着した。小艦隊の残りは旅順港に急いで戻り、そこで日本の魚雷による夜襲を受けた。港内に後退した艦船のうち、無傷のものは1隻もなかった。前進する日本陸軍の砲撃によって、これらの船は耐え難いほどの劣勢に陥った。日本艦隊には、重大な損傷を受けたものではなく、死傷者は170人だけであった。中立港に避難していたロシア船のうち、青島港のツェザレヴィッチは膠州のドイツ人総督の要求ですみやかに武装解除されたが、上海に避難した船は2週間以上も武装解除されず、そのまま港にとどまった。ディアナはフランス領インドシナのサイゴンに到着し、まもなく武装解除された。芝罘のルイシテルニは、ウラジオストクとサンクトペテルブルグへ電報を送ったといわれるが、完全に武装解除されず、最後に2隻の日本巡洋艦によって捕らえられた。この日本の行動は広範な批判を受けた。

黄海海戦の4日後、堂々たる巡洋艦ルーリック *Rurik* [1.19万トン]、ロシア *Rossia* およびグロモボイ *Gromvoi* [1.24万トン] からなるウラジオストク小艦隊は、巡洋艦ボガツール *Bogatyr* が港近くの岩場まで走ったため、一度ならず上村〔彦之丞〕中将から逃れていたが、遂に対馬島の北で発見された。はらはらさせる交戦の後、ルーリックは沈められ、巡洋艦ロシアとグラモボイはウラジオストクに辛うじて逃げ帰った。

2月から8月にかけての6カ月、陸上の日本3軍団は着実に遼陽に向かって進撃した。韓国の港に上陸した黒木〔為楨〕中尉の第一部隊は、半島を

進撃する間にいかなる抵抗も受けずに、国境の鴨緑江に達した。最初の重要な陸上戦は4月末日と5月1日に対立する軍隊の間で行われた。ザスーリッチ Zassulitch 指揮下のロシア軍は、敵の優れた銃によって圧倒され、破れかぶれの戦いと悲惨な後退の後、鳳凰城へ撤退し、そこを5月6日に再び放棄した。そして、6月7日に賽馬子を取り、黒木は摩天嶺の難しい山道に來た。彼はそこを難戦の挙句7月4日に確保したが、7月17日にロシア側は犠牲を払って再奪還しようとしたが失敗した。橋頭は7月19日に陥落し、榆樹林子と様子嶺は8月1日に陥落した。8月の終わりから、黒木は他の2つの軍団と協力しつつ、遼陽に迫った。奥中尉のもとで第2軍団は5月5日に遼東半島北東部の海岸皮子窩に上陸し、直ちに普蘭店を取り、5月26日、16時間の苦戦ののち、敵を金州と南山（南関嶺）から旅順港に駆逐した。

これらの行為によって、旅順港の兵力は満洲の他のロシア軍隊から



地図1 遼陽に進撃する日本軍

完全に切り離された。しかしながら、軍の司令官クロパトキン将軍 Kuropatkin は、遼陽の南に10万近くの兵員を擁しながら、旅順港を救うために最大の努力をせよというサンクトペテルブルグからの不可能な要求に屈した。この難しい任務のために、スタケルベルグ将軍 Stakelberg が 4 万4000人の兵士とともに派遣された。6 月13日に、得利寺で勢力の伯仲した奥将軍と、大砲と銃剣によって凄惨な戦いを繰り広げた後、ひどい損害を受けて退却した。スタケルベルグの撤退軍は 6 月21日に熊岳城、そして 7 月 6 日から 9 日まで蓋平、7 月24日から29日まで太平嶺、大石橋において、7 月31日から 8 月 1 日まで析木城において、日本軍に対して果敢な抵抗を示した。これらの交戦の後期段階では、奥軍団は野津将軍の率いる第 3 軍団の協力を得た。この部隊は 5 月19日に大孤山に上陸して、6 月 8 日に岫巖、6 月27日に分水嶺〔大石橋の北〕を攻略していた。8 月27日の第 2 軍団による鞍山站の陥落は、実際には満洲南部の軍事要衝たる遼陽の大規模な戦いの始まりを意味した。クロパトキン将軍はそこへ向けて撤退した。

遼陽の戦いは最大の戦闘とはいえないが、ある意味では最も死に物狂いの交戦だった。日本陸軍は最高司令官大山元帥のもと、約24万人の兵と 800丁の銃を擁し、7 月20日に大連に到着、ロシア軍はクロパトキン将軍の指揮のもと、約20万人の兵と572丁の銃を擁していた。市内外の防衛は、念入りでしかも大規模だった。日本軍の攻撃は計画が完全に熟する少し前に始められた。そして壁で囲まれた市の正面で、1 週間近くも複雑で決定的な戦闘が行われた。8 月31日に黒木部隊の一部は太子河を越えて堡塁を築き始めた。そしてこの場所から日本軍を全滅させると決意したクロパトキンに対抗して、黒木は 3 日間の行動ののち、全部隊を河の対岸にうつすことに成功した。

9 月 4 日、クロパトキンが遼陽に火を放ち、巧妙な撤退によって残りの部隊を黒木の部隊から脱出させ、ロシアの全軍は 9 月20日に奉天に到着した。クロパトキンはおよそ2.5万人の兵士を、大山はその半分を失った。

大雨が戦闘を中止させた。奉天のクロバトキンは、今はまず敵に向かって前進できるほどに強いと宣言した。10月5日、彼は9軍団を南方へ進撃させ、沙河の鉄道駅を易々と攻略し、本溪湖から東を防衛した。騎兵の前哨も若干の小さな勝利を記録した。大山は今や攻勢を取ることに決め、琿河まで東から北西50マイルに広がる戦線へと前進した。双方ともに堡壘の構築を試みたが、いずれも決定的な成功を収められないことが判明した。10月17日まで続いた戦闘で、ロシアと日本の損失はおそらくそれぞれ6.9万人と1.33万人に達した。クロバトキンは確実に撤退を迫られ、戦争の流れを変えるという元来の目的は失敗した。これは沙河の戦いとして知られている。

そうしているうちに、6月初旬に上陸した乃木將軍が外側の砦に必死の攻撃を始めたので、旅順港は包囲する者と包囲される者との間で驚くべき英雄主義の光景が見られることになった。管制高地は取ったり取られたりを繰り返し、地雷の爆発や周囲の要塞からの砲撃により、数百人の命が失われた。しかしながら、この一連の交戦では、敵対する軍の将兵がしばしば死体の埋葬に協力しあい、兄弟のような精神を示した。包囲軍隊が着実に迫り、要塞の包囲線が狭められた。西部の203高地の要塞はついに攻略された。11月29～30日のことであった。この地点から、日本の砲弾は港を一掃できた。12月19日の松樹堡壘と東鶏冠堡壘の陥落がこれに続いた。それらは敵の足下まで掘られたトンネルで包囲され、地雷によって爆破された。二龍山堡壘は10日後に攻略され、勇敢なステッセル將軍 Stoessel の防衛軍はもはや支えきれなかった。彼は1905年1月1日に降伏し、およそ2.5万人の残存部隊とともに、50の砦と546丁の銃を日本軍に引き渡した。しかしながら、港内の戦艦は要塞の降伏前にロシア人によって爆破され、沈められた。ステッセルを含めて帰国を望んだ将官は、腰につける武器をもって仮釈放された。1月4日、非公式な会合で乃木將軍とステッセル將軍は互いに相手の部隊を称賛しあい、ステッセルは乃木の息子2人が戦死したニュースに感動した。ステッセルは妻と数人の将校とともに、1月17日に

長崎港を出て帰途についた。旅順港の歴戦の日本人兵士およそ5、6万人が大山の部隊に合流すべく北上した。しかしながら、彼らが前線に到着する前の1月2日から31日まで、真冬の琿河の黒溝台でグリッペンベルグ將軍 Grippenberg の第2軍隊と大山の部隊との間で熾烈な戦闘が行われた。結果はどちらにとっても決定的な勝利ではなく、ロシア側は日本側のおおよそ2倍、すなわち1.5万人が死傷した。グリッペンベルグはこの戦いの後、公然と上司クロパトキンとの意見の不一致を宣言して、司令官を辞任し、カウルバース將軍 Kaulbars と交替した。

奥〔保鞏〕師団の左翼に乃木部隊、黒木〔為禎〕師団の右翼に川村〔景明〕部隊を加えて、5個師団16連隊、少なくとも40万人の兵力を指揮して、大山はおよそ100マイルの前線を占領した。この巨大な軍隊は、奉天のクロパトキン指揮下の少なくとも35万人の兵力との、おそらく史上最大の戦闘（あるいは一連の戦闘）に決着をつけようとした。交戦は2月20日に始まり、3月16日まで続き、ロシア側の決定的な敗北に終わった。3月7日まで、クロパトキンの左翼は黒木によって悩ませられ、右翼は乃木の側面攻撃から防衛していたが絶望的であり、中央部はコサックのレンネンカンフ Rennenkampf とともに、リネヴィッチ將軍とカウルバース將軍の指揮下で野津〔道貫〕と奥〔保鞏〕の猛攻撃に対して断固として反撃した。この日の夜に退却の命令が出された。というのは、これ以上遅らせると、クロパトキンの師団が包囲され、全滅させられるおそれがあったからだ。日本軍は逃れる敵を追跡して、琿河を越える前に少しの時間も彼に与えなかった。3月9日の目も開けられない砂じんの嵐も肌をさすような厳寒も、追撃の厳しさを大いに減じさせることはなかった。3月10日早朝、大山は奉天に入城した。強固な防衛線と、撫順大炭鉱から東部は翌日に攻略された。ロシア軍は北方40マイルの鉄嶺まで総崩れで退却した。リネヴィッチの軍隊だけは、北方40マイルへ秩序ある退却を行った。鉄嶺は16日に攻略され、ロシア軍はさらに北へと退却した。ロシア軍の損失はたぶん15万人の兵力、または全軍の40パーセント以上であるのに対して、日本人の死傷者はおよ

そその3分の1であった。ロシア皇帝は直ちに戦時議會を召集し、新たに45万人のロシア軍を東洋に派遣することを決定した。鉄嶺陥落の翌々日、ロシア皇帝はクロパトキンに電報を打ったが、そこに称賛の言葉はなく、満洲の軍隊に対するクロパトキンの指揮権はリネヴィッチに引き渡された。クロパトキンはハルピンに撤退し、そこで新しい最高司令官の下で働くことになった。

ロシアのバルチック艦隊の東洋への出発については数回発表されたが、1904年10月中旬になってようやくロジェストヴェンスキー海軍中将 Rozhdestvenski 指揮下でクロンシュタットを出発した。日本の水雷艇がヨーロッパの水域にありとする根拠なき噂によって、ロシア艦隊の一部将校は北海のドッカーバンク〔北海の好漁場〕でイギリスの漁船2隻を砲撃し、10月21日にはトロール船を沈め、2人の漁師を死なせ、幾人かを負傷させた。それから艦隊は全速力で南下した。異なる時期に、ノルウェー船、スウェーデン船、デンマーク船、およびドイツ船にも攻撃をかけた。ドッカーバンク事件のニュースが24日、ハルに届いたとき、イギリス全体に火がつき、より急進的な人々はロシアとの戦争を勧告した。しかしながら、英政府の平静さとフランスの助力もあり、事件は海軍専門家による国際的な法廷調査にゆだねられた。1905年2月25日、国際法廷は、砲撃は正当化されない、不当に長引いたものであったが、ロシア海軍大將とそのスタッフの軍人らしい武勇と人道主義の感情を損なうものではない、とする多数派の意見を公表した。ドッカーバンク事件の直後に、バルチック艦隊は二手に分かれた。一方はベルケルサム海軍大將 Voelkersam の指揮でスエズ運河を経由し、他方はロジェストヴェンスキー海軍中将の指揮で喜望峰を回った。2つの支隊は1月にインド洋で合流し、フランス領マダガスカル島の近くで新規の乗組員を訓練した。第三支隊はネボガトフ海軍大將 Admiral Nebokatoy の指揮で、2月15日にリバウ〔現ラトビアの港湾都市〕を発ち、中国の水域に入る前に主力に合流した。仏領インドシナのサイゴンとカムラン湾近くに艦隊が停泊することは、中立港における敵軍艦隊の権利に関

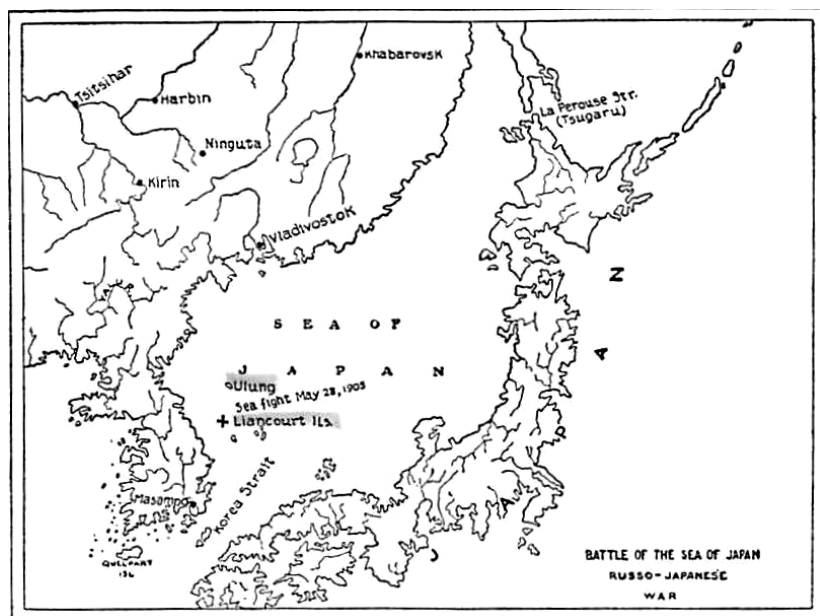
する微妙な問題をひき起こしたが、ロシア艦隊をフランス水域から離れさせるという、ロシア皇帝とフランス政府が行った、ゆっくりではあるが明確な措置によって、摩擦は回避された。5月の終わり頃、全艦隊は最終目的地に向かった。東郷海軍大將は旅順陥落後、東京を訪問したが、その勝利と生来の謙虚さと人格とによって国民を奮い立たせた。彼は朴訥な農夫のように、まだやるべきことがたくさんあると語り、民衆の大喝采を受けることを避けた。東郷大將は1905年2月6日、1年前に佐世保から旅順港に向かって艦隊を率いた日と同じ日に東京を去って、ロジェストヴェンスキーの艦隊と戦うためにあらゆる準備を行っていた。ロジェストヴェンスキーが到着する数日前に、東郷大將は津軽海峡やラペルース海峡ではなく、朝鮮海峡を通ると予想して、馬山浦近くに全艦隊を待機させた。

5月27日午前5時、東郷の斥候はバルチック艦隊をケルパート島近くで発見したと無電で知らせた。このニュースに興奮し、すべての部隊は直ちに割り当てられた任務に備えた。海には濃霧がたちこめ、南西からの強風のため、波は高かった。日本の巡洋艦2隻が敵に向かって進み、午前10～11時に敵を海峡の日本側に導き、午後1時半に主力に合流した。敵艦隊は今や2列縦隊であり、右舷に戦艦と巡洋艦、左舷に沿岸防御艇がジェムチウグJemchug [3106トン] とイズムルドIzumrud [3106トン] に導かれ、それに小型船が長く続き、数マイルにも及ぶ構成となっていた。ロシア船は黒く塗装され、煙突は黒い縁取りの中が黄色で、海上で目立った。これに対して日本船は浅緑と灰色であり、ロシア船ほど見分けがつかなかった。2時直前に東郷は全艦隊に合図した。「帝国の運命はこの戦いにかかっている。各人が最善を尽くせ」と。東郷が直接指揮する戦隊と上村指揮下の巡洋艦は敵を東の方向に押し進め、6000米の距離から最前のロシア船に猛烈な砲火を浴びせ、他の日本支隊は後方から敵を攻撃した。1時間以内に大勢は決した。オスリヤービヤOslyabya [1.27万トン]、アレクサンドル3世Alexander III [9500トン]、および旗艦クニャージ・スヴォーロフKniaz Suvarov [1.35万トン] から火が出て、行動できなくなった。



THE ASSAULT THROUGH THE BARBED WIRE ENTANGLEMENTS AGAINST
FORT KI-KWAN, DECEMBER 19, 1904

画2 鶏冠山堡壘への攻撃 1904年12月19日



地図2 日本海における戦闘

後方の小型船数隻も同様だった。煙が海上の風によって漂い、敵艦隊を互いの視野から隠した。主力戦隊による砲撃は午後2時45分まで続いた。ベルケルサム海軍大将ベルケルサムが戦死し、ロジェストヴェンスキー自身は意識不明の状態で駆逐艦に移され、指揮はネボガトフ Nebogatov に委ねられた。ロシア艦隊は午後3時から必死に北方へ逃れようと努力したが、猛然と砲撃されたので、南に転じた。今度は、戦闘はいくつかの箇所が発生し、日没まで激しく続いた。オスリャービャ、アレクサンドル3世 Alexander III、ボロディノ Borodino [1.35万トン]、クニャージ・スヴォーロフ、すべての戦艦と2隻の救命ボートが沈没した。日没になると、日本の水雷艇の出番がきた。戦艦ナヴァリン Navarin [9500トン] を沈め、戦艦シソイ・ヴェリキー Sissoi Veliky [8900トン] と装甲巡洋艦ナヒーモフ Nakhimov [8500トン] とモノンザーク Mononzakh [6000トン] の戦闘能

力を奪い、敵を絶望的な混乱に陥れることに成功した。これら3隻は翌日、沈んだ。5月28日、霧が晴れた。東郷と上村指揮下の主力艦隊は午前5時半に鬱陵島付近で、船首を北方に向けた戦艦2隻、沿岸防衛艇2隻、巡洋艦2隻からなるロシア艦隊を発見した。別の支隊はリアンクール島〔日本語竹島、韓国語独島〕付近で完全に敵を包囲し、ネボガトフ海軍大将 Nebogatov はそれからまもなくして午前10時半降伏した。巡洋艦イズムルドだけは逃げた。午後に2隻の日本の駆逐艦が2隻のロシア駆逐艦を発見して追跡した。その1隻ベドーヴィ Biedovy は傷ついたロジェストヴェンスキーを移送していたが、降伏した。もう1隻は逃げた。巡洋艦スヴェトラナ Svetlana [3820トン] とドミトリ・ドンスコイ Dmitri Donskoi [5900トン]、沿岸警備艇オウシャコフ Oushakov、そして駆逐艦は沈没するか、駆逐された。2日間におけるロシアの損失は、6隻の戦艦、1隻の沿岸警備艇、5隻の巡洋艦、5隻の駆逐艦、1隻の艦装換え巡洋艦、4隻の特殊軍用艇であった。1.8万人の乗組員のうちおよそ1.2万人が船とともに沈んだ。日本側は水雷艇3隻だけをなくし、116人が戦死し、538人が負傷し、2隻の戦艦、2隻の沿岸防衛艇、1隻の駆逐艦を鹵獲された。逃れたロシア船のうち、巡洋艦アルマーズ Almaz [3285トン] と2隻の駆逐艦はウラジオストクに着いたが、駆逐艦1隻と特殊軍用艇2隻は上海に向かい、巡洋艦アウロラ cruisers Aurora [6600トン] とアレフ Oleg [1.35万トン]、ジェムチウグ Jemchug はマニラへ行き、武装解除された。東郷海軍大将は彼独特のやり方でこう報告した。「勝利の奇跡は、すべて天皇の輝かしい美徳により、人智の可能性を超えるものだ」「相対的に小さな損失は帝国の祖先の御霊による加護の賜物と信じないわけにはいかない」と。

日本海での決定的な戦いが終わるやいなや、アメリカの大統領セオドア・ルーズベルトはロシアに交戦国当事者間でのみ講和条件を論じるという努力を再開し、日本と平和条約を結ばせようとした（これは2月に一度失敗していた）。この努力はフランス政府とドイツ皇帝によって支持された。ワシントンの日本代表、高平小五郎〔公使〕とロシア代表、カッシーニ侯

爵との予備相談後、ルーズベルトはサンクトペテルブルグと東京の政府に以下の覚書を示した。

大統領は、すべての人類の利益のため、現在行われているひどく悲しい戦争を終わらせることが不可能でないならば、そのときがやって来たと感じる。ロシアと日本の両方に対して合衆国は友情と好意の結びつきを引き継いでいる。アメリカは双方の繁栄と福祉を期待し、世界の進歩が偉大な両国の戦争によって遅らせられると感じる。

大統領はロシアと日本の政府が自分自身のためばかりではなく、文明世界全体の利益に照らして、相互に直接の和平交渉を行うよう主張する。和平交渉は、交戦両国が直接に、しかも両国だけで行うこと、すなわち、両国代表が講和条件に同意することが可能かどうかを知るために、ロシアと日本の全権大使あるいは代表がいかなる仲介もなしに行うことを提案する。大統領は、ロシア政府が今そのような会議の開催に同意することを誠実に求め、同時に日本政府に対しても同じことを求める。

大統領はいかなる仲介者も和平交渉自体に招くべきではないと感じるが、当事者の両国にとって助けになり、会議の時間と場所についての調整が必要ならば喜んでそれをやるつもりである。しかし、たとえどのような方法であれ、これらの準備を含めて両国が直接できるならば、大統領はこれを歓迎する。なぜなら大統領の唯一の目的は文明社会全体に平和がもたらされる会議を開くことだからである。

日本政府は、日本は和平条件についてロシアと直接的、排他的な交渉を誠実に行うといいつつ、(大統領提案を) 受け入れた。ロシア側の回答は、当初は口頭で、最後には日本と同じ言葉で返された。日本は講和使節として外相小村男爵とワシントン公使高平小五郎を任命した。当時、ムラビエフ大使はローマにあり、ロシアの首席全権は最初はパリ駐在のネリドフ大

使Nelidovであったが、その後ローマ駐在大使ムラビエフに変わり、さらに閣僚会議議長セルゲイ・ウィッテ伯爵Count Serge Witteに代わった。ワシントン駐在の新ロシア大使ローゼン男爵Baron Rosenはロシア代表団の次席に任じられた。交渉の場所についていえば、ロシアの提案したパリも日本の提案した芝罘も、どちらも相手側に受け入れられず、最終的に双方はワシントンで合意した。しかしながら、アメリカの首都の夏はあまりにも暑いので、実際の交渉はニューハンプシャー、ポーツマスPortsmouthの静かで歴史的な町の海軍基地内で開催されることが決まった。代表団は8月1日までに到着すると発表された。その間、7月末までに、日本が1875年まで要求していたロシア領サハリンの南部は、日本軍に占領された。日本はシベリア南東部沿岸のいくつかの地点も占領した。交戦国の使節が到着し、8月5日、メイフラワー号船上でルーズベルト大統領によって互いに紹介され、そこからポーツマスに進み、8日に到着した。彼らはポーツマス近郊のニューカッスルという小島にあるウェントワース・ホテルに滞在したが、そこには好奇心の強い避暑客と世界のあらゆる地域から来た100人以上の新聞特派員が集まった。使節の最初の非公式な打ち合わせは、海軍構内における海軍の購買店のビルで行われた。しかし、実際の和平交渉は翌日から始まった。当日、小村〔寿太郎〕男爵は和平条件十二カ条の文書を提起した。その十二カ条は以下の点をカバーしていたと考えられる。

すなわち、①韓国における日本の権益の優先と門戸開放の原則、②満洲からの日本とロシアの軍隊の撤退、③満洲における中国の行政の回復、④中国の領土保全と満洲における門戸開放、⑤サハリン島の日本への割譲、⑥旅順港、大連および付属諸島を含めて関東州を日本に租借すること、⑦旅順港（と大連）とハルビン間の鉄道の日本への引き渡し、⑧満洲鉄道の基幹部分、満洲～グロチェコボ区間をロシアが保有すること、⑨日本の戦費をロシアが支払うこと、⑩中立国港湾に抑留されているロシア戦艦の引き渡し、⑪太平洋でのロシア海軍力の制限、⑫シベリア水域で日本臣民が漁業を行う権利、である。

これらの条件に対してウィットは12日に書面による回答を行い、その一部には同意、一部については継続協議を要求、その他については絶対的拒否の姿勢を示した。それから使節たちは逐条的に議論し、6日間で①、②、③、④、⑥、⑦、⑧の七カ条について実質的に、あるいは原則的に合意した。残りの四カ条、特にサハリンの割譲と戦費の賠償は、帝国の名誉と権威にかけて受け入れられないと考えた。

交渉は失敗に終わるかに見えた。そのとき、8月12日に金子〔堅太郎〕男爵がオイスター湾にルーズベルト大統領を訪問し、翌日、ローゼン男爵をニューキャッスルから招待した。金子は21日に再びルーズベルトを訪問したが、サンクトペテルブルグのアメリカ大使マイヤー Meyer がその2日後にロシア皇帝と長時間にわたる会見を行った。これらのさまざまな交渉ルートを通じてルーズベルト大統領は2つの政府に対して、平和のためになんらかの妥協をするよう主張していた。マイヤーが皇帝の謁見を受けたとき、日本政府はルーズベルトの提案に応じて抑留船の降伏要求とロシア海軍力の削減要求を取り下げ、日本が軍事的に占領したサハリン北半分を120万円で買い戻すことを認める意向を示した。しかし、ロシア皇帝はこの妥協を明確に拒否した。というのは、提案された買い戻しは偽装された賠償だと考えたからである。彼は賠償には根本的に反対であった。マイヤー大使が繰り返し説得を試みたにもかかわらず、ニコライ2世は考えを変えなかった。ロシア皇帝の指示によってか、ウィット自身の考えであるかは不明だが、サハリンの南半分は日本に提供された。そうしているうちに、ルーズベルト大統領は日本に呼びかけ、東京の枢密院が熟考して、賠償要求を放棄して、サハリンの南半分を獲得することでよしとする天皇の指示がポーツマスの代表に届いた。この最終的な譲歩案でついに和平が可能になり、8月29日朝の会合で、小村男爵はウィットと世界を完全に驚かせることになった。そこで条約の項目が起草され、9月5日に使節によって署名された。枢密院の譲歩は日本人々を大いに失望させた。彼らは強力な敵に対する勝利からなにかを期待していたからであった。地方の状況

によって激昂した人々の不満は、9月5～7日に爆発し、東京の路上での公然たる暴動⁵に発展した。

ロシアでも条約は平和を愛好する農民にさえも、100%の喜びをもって受け入れられることはなかった。というのは、平和を歓迎したが、戦争と戦争の失敗として講和の条件に体现されたものが不必要であり、不名誉なものと受けとられたからである。しかしながら、両国の主権者は10月14日に条約を批准した。以下は、その有名な文書である：

日本国皇帝陛下およびロシア国皇帝陛下は、両国およびその人民に平和の幸福を回復せむことを欲し講和条約を締結することに決定し、これがために日本国皇帝陛下は外務大臣従三位勲一等男爵小村寿太郎閣下およびアメリカ合衆国駐劄特命全権公使従三位勲一等高平小五郎閣下を、全ロシア皇帝陛下は男爵ローマン・ローゼン閣下をおのおのその全権委員に任命せり。よって各全権委員は互にその委任状を示し、その良好妥当なるを認め、もって左の諸條款を協議決定せり。

第一条 日本国皇帝陛下と全ロシア国皇帝陛下との間および両国ならびに国臣民の間に、将来平和および親睦あるべし。

第二条 ロシア帝国政府は日本国が韓国において政事上、軍事上および経済上の卓絶なる利益を有することを承認し、日本帝国政府が韓国において必要と認むる指導、保護および監理の措置を執るにあたり、之を阻礙または之に干渉せざることを約す。韓国におけるロシア国臣民は、他の外国の臣民または人民と全然同様に待遇せらるべく之を換言すれば最恵国の臣民または人民と同一の地位に置かるべきものと知るべし。両締約国は一切誤解の原因を避けむがため、露韓国の国境においてロシア国または韓国の領土の安全を侵迫することあるべき何等の軍事上措置を執らざることに同意す。

⁵ 日比谷焼き討ち事件など。

第三条 日本国およびロシア国は互に左の事を約す。①本条約に付属する追加約款第一の規定に従い、遼東半島租借権がその効力を及ぼす地域外の満洲より全然且同時に撤兵すること。②前記地域を除くの外、現に日本国またはロシア国の軍隊において占領しまたはその監視の下にある満洲全部を挙げて全然清国専属の行政に還付すること。ロシア帝国政府は清国の主権を侵害し、または機会均等主義と相容れざる何等の領土上利益または優先的もしくは専属的譲与を満洲において有せざることを声明す。

第四条 日本国およびロシア国は清国が満洲の商工業を発達せしめむがため、列国に共通する一般の措置を執るにあたり、之を阻礙せざることを互に約す。

第五条 ロシア帝国政府は清国政府の承諾をもって旅順口、大連ならびにその付近の領土および領水の租借権および該租借権に関連しまたはその一部を組成する一切の権利、特権および譲与を日本帝国政府に移転譲与す。ロシア帝国政府はまた前記租借権がその効力を及ぼす地域における一切の公共営造物および財産を日本帝国政府に移転譲渡す。両締約国は前記規定に係る清国政府の承諾を得べきことを互に約す。日本帝国政府においては前記地域におけるロシア国臣民の財産権が完全に尊重せらるべきことを約す。

第六条 ロシア帝国政府は長春（寛城子）旅順口間の鉄道およびその一切の支線ならびに同地方において之に付属する一切の権利、特権および財産および同地方において該鉄道に属しまたはその利益のために経営せらるる一切の炭坑を補償を受くることなくかつ清国政府の承諾をもって日本帝国政府に移転譲渡すべきことを約す。両締約国は前記規定に係る清国政府の承諾を得べきことを互に約す。

第七条 日本国およびロシア国は満洲における各自の鉄道を全く商工業の目的に限り経営し、決して軍略の目的をもってこれを経営せざることを約す。該制限は遼東半島租借権がその効力を及ぼす地域にお

ける鉄道に適用せざるものと知るべし。

第八条 日本帝国政府およびロシア帝国政府は、交通および運輸を増進し、かつこれを便宜ならしむるの目的をもって満洲におけるその接続鉄道業務を規定せんがため、なるべく速やかに別約を締結すべし。

第九条 ロシア帝国政府はサハリン島南部およびその付近における一切の島嶼並びに該地方における一切の公共営造物および財産を完全なる主権とともに永遠日本帝国政府に譲与す。その譲与地域の北方境界は北緯五十度と定む。該地域の正確なる境界線は本条約に付属する追加約款第二の規定にしたがい、これを決定すべし。日本国およびロシア国はサハリン島またはその付近の島嶼における一切各自の領地内に堡塁その他之に類する軍事上工作物を築造せざること互に同意す。また両国は各宗谷海峡および韃靼海峡の自由航海を防礙することあるべき何等の軍事上措置を執らざることを約す。

第十条 日本国に譲与せられたる地域の住民たるロシア国臣民については、その不動産を売却して本国に限去するの自由を留保す。ただし該ロシア国臣民において譲与地域に在留せむと欲するときは日本国の法律および管轄権に服従することを条件として完全にその職業に従事し、かつ財産権を行使するにおいて支持保護せらるべし。日本国は政事上または行政上の権能を失いたる住民に対し、前記地域における居住権を撤回し、または之を該地域より放逐すべき十分の自由を有す。ただし日本国は前記住民の財産権が完全に尊重せらるべきことを約す。

第十一条 ロシア国は日本海、オホーツク海およびベーリング海に瀕するロシア国領地の沿岸における漁業権を日本国臣民に許与せむがため、日本国と協定をなすべきことを約す。前項の約束は前記方面において既にロシア国または外国の臣民に属する所の権利に影響を及ぼさざること双方同意す。

第十二条 日露通商航海条約は戦争のため廃止せられたるをもって日本帝国政府およびロシア帝国政府は現下の戦争以前に効力を有した

る条約を基礎として相互に最恵国の地位における待遇を与うるの方法を採用すべきことを約す。しこうして輸入税および輸出税、税関手続、通過税および噸税並びに一方の代弁者、臣民および船舶に対する他の一方の領土における入国の許可および待遇はいずれも前記の方法による。

第十三条 本条約実施の後なるべく速かに一切の俘虜は互に之を還付すべし。日本帝国政府およびロシア帝国政府は各俘虜を引受くべき一名の特別委員を任命すべし。一方の政府は収容にかかる一切の俘虜は他の一方の政府の特別委員または正当にその委任を受けたる代表者に引渡し同委員はその代表者においてこれを受領すべく、しこうしてその引渡および受領は引渡国より予受領国の特別委員に通知すべき便宜の人員および引渡国における便宜の出入地においてこれを行うべし。日本帝国政府およびロシア帝国政府は俘虜引渡完了の後、なるべく速かに俘虜の捕獲または投降の日より死亡または引渡の時に至るまでこれが保護給養のために各負担したる直接費用の計算書を互に提出すべし。同計算書交換の後ロシア国はなるべく速かに日本国が前記の用途に支出したる実際の金額とロシア国が同様に支出したる実際の金額との差額を日本国に払戻すべきことを約す。

第十四条 本条約は日本皇帝陛下および全ロシア国皇帝陛下において批准せらるべし。該批准はなるべく速やかにかついかなる場合においても本条約調印の日より五十日以内に東京駐劄フランス国公使およびサンクトペテルブルグ駐劄アメリカ合衆国大使を経て日本帝国政府およびロシア帝国政府に各々これを通告すべし。しこうしてその終りの通告の日より本条約は全部を通して完全の効力を生ずべし。正式の批准交換はなるべく速やかにワシントンにおいてこれを行うべし。

第十五条 本条約はイギリス文およびフランス文をもって各二通を作りこれに調印すべし。その各本文は全然符合すといえどもその解釈に差異ある場合にはフランス文によるべし。右証拠として両帝国全権委員はここに本講和条約に記名調印するものなり。明治三十八年九月

五日すなわち一九〇五年八月二十三日（九月五日）ポーツマス（ニューハンプシャ州）においてこれを作る。

第三条への追加約款

第三条に付、日本帝国政府およびロシア帝国政府は同時にかつ講和条約の実施後直ちに満洲の地域より各その軍隊の撤退を開始すべきことをたがいに約す。しこうして講和条約実施の日より十八個月の期間内に両国の軍隊は遼東半島租借地以外の満洲より全然撤退すべし。前面陣地を占領する両国軍隊は最先に撤退すべし。両締約国は満洲における各自の鉄道線路を保護せむがため守備兵を置くの権利を留保す。該守備兵の数は、一キロメートルごとに十五名を超過することを得ず。しこうして日本国およびロシア国軍司令官は前記最大数以内において実際の必要に顧みこれを使用せらるべき守備兵の数を双方の含意をもってなるべく少数に限定すべし。満洲における日本国およびロシア国軍司令官は前記の原則にしたがい撤兵の細目を協定し、なるべく速やかにかついかなる場合においても十八個月を超えざる期間内に撤兵を実行せむがため、双方の含意をもって必要なる措置を執るべし。

第九条への追加約款

両締約国において各任命すべき同数の人員よりなる境界確定委員は、本条約実施後なるべく速やかにサハリン島における日本国およびロシア国領地間の正確なる境界線を永久の方法をもって実地につき画定すべし。該委員は地形の許す限り北緯五十度をもって境界線となすことを要す。もしいずれかの地点において同緯度より偏倚するの必要を認むるときは他の地点における対当の偏倚によりてこれを填補すべし。該委員は譲与中に包含せらるる付近島嶼の表および明細書を調製するの任にあたりかつ譲与地域の境界を示す地図を調製しこれに署名すべし。該委員の事業は両締約国の承認を経ることを要す。前記追加約款はその付属する講和条約の批准とともに批准せられたるものと見做さるべし。

日露条約と同じくらい重要なものとして、イギリス外相ランズダウン卿とロンドン駐在公使林董男爵との間で8月12日ロンドンで調印され、9月27日にロンドンと東京で同時に発表された日英同盟の改正がある。その本文は以下のごとくである。

日本国政府および大ブリティン国政府は、一九〇二年一月三十日両国政府間に締結せる協約に代りうるに新約款をもってせむことを希望し、①東亜およびインドの地域における全局の平和を確保すること。②清帝国の独立および領土保全ならびに清国における列国の商工業に対する機会均等主義を確実にし、もって清国における列国の共通利益を維持すること。③東亜およびインドの地域における両締盟国の領土権を保持し、ならびに該地域における両締盟国の特殊利益を防護すること、を目的とする左の各条を約定せり。

第一条 日本国または大ブリティン国において本協約前文に記述せる権利および利益のうちいずれか危殆に迫るものと認むるときは、両国政府は壮語に充分に、かつ隔意なく通告し、その侵迫せられたる権利または利益を擁護せむが為に執るべき措置を協同に考量すべし。

第二条 両締盟国の一方が挑発することなくして一国もしくは数国より攻撃を受けたるにより、または一国もしくは数国の侵略的行動により該両締盟国において本協約前文に記述せるその領土権または特殊利益を防護せむが為交戦するに至りたるときは、前記の攻撃または侵略的行動がいずれの地において発生するを問わず、他の一方の締盟国は直ちに來たりてその同盟国に援助を与え、協同戦闘に当たり、講和もまた双方合意のうえにおいてこれをなすべし。

第三条 日本国は韓国において政治上、軍事上および經濟上の卓絶なる利益を有するをもって、大ブリティン国は日本国が該利益を擁護増進せむが為、正当かつ必要と認むる指導、監理および保護の措置を

韓国において執るの権利を承認す。ただし該措置は常に列国の商工業に対する機会均等主義に反せざることを要す。

第四条 大ブリティン国はインド国境の安全につながる一切の事項に関し、特殊利益を有するをもって日本国は前記国境の付近において大ブリティン国がそのインド領地を擁護せむが為必要と認むる措置を執るの権利を承認す。

第五条 両締盟国はいずれも他の一方と協議を経ずして他国と本協約前文に記述せる目的を害すべき別約をなさざるべきことを約定す。

第六条 現時の日露戦争に対しては大ブリティン国は引続き厳正中立を維持し、他の一国もしくは数国が日本国に対し交戦に加わるるときは大ブリティン国は来たりて日本国に援助を与え、協同戦闘にあたり講和もまた双方同意のうえにおいてこれをなすべし。

第七条 両締盟国の一方が本協約中に規定する場合に際し、他の一方に兵力的援助を与うべき条件および該援助の実行方法は、両締盟国陸海軍当局者において協定すべく、また該者は相互利害の問題に関し相互に充分にかつ隔意なく随時協議すべし。

第八条 本協約は第六条の規定と抵触せざるかぎり調印の日より直ちに実施し、十カ年間効力を有す。右十カ年の終了に至る十二カ月前に両締盟国のいずれよりも、本協約を廃棄するの意思を表示したる当日より一カ年の終了に至るまで、引続き効力を有す。しかれどももし右終了期日に至り同盟国の一方が現に交戦中なるときは、本同盟は講和の成立に至るまで当然継続すべし。

9月13日に休戦体制がロシア軍と日本軍の間で整えられた。1904年2月から1905年9月までの19カ月間の戦争で、ロシアはおそらく80～90万人の兵士を東洋に送り、日本は少なくとも60万人を送った。世界史においてかくも大量の兵士が短期間に戦場に送られた例はない。ロシアの損失は死傷者、罹患者、俘虜などを含めておそらく35万人以上に達しよう。日本は戦

死者だけで7万2490人を失った。日本の死者のうち1万5300人は病死であり、病死率は例外的に低い。それ以外は戦場での戦死か、戦傷死である。ロシアは太平洋艦隊とバルチック艦隊の大半を失った。日本海軍は敵の艦船の引渡しや水没船の引上げによって増強された。戦争は日本人の強い国民感情を大いに刺激し、世界列強における地位を高めた。穏やかな講和条件と国民性の寛容さは、不当な拡張主義に対して役立たなければならない。他方、ロシアの官僚制度の弱点が図らずも露呈され、政治力に対する過大評価は消えた。ヨーロッパでは、またアジアでも同様だが、国際情勢におけるロシアの地位は変化の兆候を示し始めた。同時にロシアの人々は、自らによる国家行政の必要性に対する信念を新たにした。そして、独裁政治が弱められ、改革への人々の要求が強まった。戦争の最も重要な結果は、満洲における中国の領土保全という人道主義的な原則を保証し、同地域と韓国における貿易と産業の機会均等をすべての国民に認めた事実である。ポーツマス条約はこれらの原則を認め、日英同盟は強力な盟友関係によってこれを保証した。

1905年11月6日、英国王エドワード7世から天皇にガーター勲章が授与され、日本のイギリス公使館は大使館に格上げされた。天皇は11月に伊勢神宮を参拝して先祖の霊に戦勝を報告した。年末には中国との条約が締結されたが、これによって日本の地位は戦前のロシアと同じものとなった。1906年10月、合衆国のサンフランシスコ教育委員会は同市の公立学校に日本人の子供を入れないよう、東洋人は別の学校に通うことを命ずる通達を出した。日本政府はこの措置を無礼と受け止め、10月15日に合衆国政府に抗議した。この事件についてルーズベルト大統領は速やかな行動をとり、内務大臣ビクター・H・メトカーフに調査報告を命じた。ルーズベルト大統領は、日本の条約上の権利はいかなる危険にも関わらず実施されると発表した。大統領とカリフォルニア政府役人との会議が開かれ、1907年3月14日、大統領は次のような命令を出した。すなわち、パスポートを所持していないすべての日本人と韓国人はアメリカから退去させられ、サンフラ

ンシスコ教育委員会は16歳未満の日本人生徒の就学を認めると。この時期の扇情的な日米の新聞は両国のあいだで戦争が勃発するという噂であふれ、1907年には戦争は切迫したものと言われた。

そうしているうちに、外務大臣林伯爵の指導のもと、日本政府は日本における外国人労働者の使用に関する法令を作り、合衆国への日本移民を制限する措置を取った。アメリカの陸軍長官ウィリアム・ハワード・タフトがフィリピンへの旅の途中で日本を訪問し、日本は友好的にこれを受け入れた。タフトが帰国後、日本最良気味の談話を語り、それによってアメリカ人のあいだにくすぶっていた対日敵意が鎮静化した。さらに翌年、16隻のアメリカ戦艦が日本を訪問して、すべての戦争話に終止符を打った。1907年にはまた英国と日本との間で類似の摩擦が発生した。カナダのバンクーバーで一部の日本商人と労働者が襲撃され、家から追い出された。この事件は林伯爵と英大使クロード・マクドナルド卿によって平和裡に仲裁された。日本が合衆国への移住を規制するという約束の証拠は1908年の移民統計に示されている。その年、合衆国への移民が認められて出国したのは185人だけであり、それよりはるかに多くの日本人労働者が合衆国を離れて帰国した。

1909年秋に日本から派遣された通商代表団がアメリカを訪問し、アメリカの産業とその方法を調査した。そして、さまざまな工業製品を買ったが、それらは従来東洋の市場にはみられないものであった。最新の機械、鉱山業のための機械や食料保存の技術、そして銀行と商業オフィスで用いられる労働量を削減する方法を学んだ。

1907年6月10日には日仏協定が署名され、仏領インドシナの日本官民に最恵国待遇を与えた。同じ待遇は日本の仏領インドシナ民にも与えられるべきとして、これらの但し書きは1896年8月4日に日仏間で結ばれた通商航海条約が破棄されるまで保持するものとした。アジア大陸については、両国は特別の利害をもつことに鑑みて「すべての国民の中国における商業上での機会均等とともに独立と領土保全を尊重し、主権、保護権、占領の

権利をもつ中華帝国と隣接する地域において、平和と安全を確保するために、アジア大陸において双方がそれぞれの立場と領土権を相互に尊重しあう」。

1907年にはいくつかの日露協約が署名された。その最初のものは7月28日に締結された。ポーツマス条約第十二条に基づく通商航海条約である。次はその2日後、相互に領土保全で同意した。この協約は日露両国と中国に適用され、中国の独立と領土保全、そしてあらゆる平和的な手段によって現状を維持すべきとされた。第3の協定は日本海、オホーツク海、ベーリング海の漁業に関わるものである。第4は満洲寛城子（長春）のロシア鉄道との合併である。8月に東京とサンクトペテルブルグの公使館は大使館に格上げされた。

1908年2月5日、中国税関の役人がマカオ沖のポルトガル水域で日本汽船辰丸を差押えた。それには日本の港から積みだされ、中国のマカオ商人宛てに送られた武器が積まれていた。日本人は捕獲に抗議して謝罪と保障を中国当局に要求した。初め中国当局はそれらの行為を正当化したが、3月5日の日本からの最後通牒の後、中国は謝罪し、賠償金の支払いと責任者の処罰を保証した。日本はその代わりに、日中の市民の間での武器と弾薬の売買禁止に同意した。かくて両国政府には友好的な感情が回復されたが、中国の世論は大きな炎に包まれ、日本商品のボイコットが始まった。その年、多くの日本船が中国の港を積み荷なしのままに出た。日本人はこのボイコットでおよそ800万ドルを失ったものと推計される。

同年、満洲における日本の諸政策のあり方をめぐって、中国の官民が憤激する事態が生じた。日本が奉天の公共建築物、満洲の金鉾山、満洲郵便局の所有物、電報線を接収し、吉林省の一部を占領したことに対して、この地域はすでに中国人が住み着いて久しいにも関わらず、「これは韓国人の領土だ」等と主張した。吉林省当局はまた遼河西部に至る地域における日本の鉄道建設を禁じた。曰く、新民屯から法庫門に至るまで日本による鉄道建設は、中国の利益と競合するから許されない、と。これらの対立はまもなく妥協に達した。日本による引き込み線等の建設範囲をロシア

から譲り受けた満鉄線沿線から最小の範囲に止めるという条件で双方はに同意した。10月12日と11月7日に電信回線に関する協定が東京で調印された。中国は条約港間、すなわち寛城子、鉄嶺、奉天、牛莊、安東に特別の電信線をおくことに同意した。そして、日本の鉄道専用地に15年間、日本政府が使用する日本人職員による電報サービスを認め、日本の電報制度の直接的管理下で電報の交換にのみ用いられること。日本は、満洲の鉄道ではすべての日本電信回線が中国を通過するけれども、満洲の専用地外にはいかなる電報電話回線も設けず、租借された領土外にはいかなる電報、電話回線も設けないことに同意したのであった。さらに日本は、日本から満洲の電信回線に送った通信の回線使用料を中国に対して支払うことに同意した。1909年9月4日、北京で安東—奉天鉄道の改良についての協定が調印されたが、それは満洲貿易において日本に利益を与えるものとなった。

衆議院総選挙は1908年5月15日に行われたが、政友会の大勝利に終わった。国会開設以来初めて、一政党が全議員の過半数を占めた。7月12日、桂侯爵は天皇から組閣の勅命を受けた。桂は最弱の政党、大同倶楽部と関係していたので、政友会に大きな失望を与えた。彼らはみずからの代表の首相就任を望んでいたからだ。

1909年7月、帝国議会の23人の議員が汚職醜聞の共犯として有罪判決を受けた。大日本精糖の5人の取締役が同時に贈賄で有罪を宣告され、議員28名が重い判決を受けた。その間、韓国での日本の影響は1907年末には韓国の端まで及び、韓国はすべての実目的からして日本の一部に組み込まれた。日露戦争が勃発すると、日本は韓国と協定「日韓議定書」を結んだが、それによって日本は韓国皇室の安全を保証し、独立と領土保全を保証した。その代わりに韓国は行政改革について日本の勧告を受け入れることに同意した。6カ月後、韓国は日本と結んだもう1つの協定「第一次日韓協約」で、日本人の財政顧問と外交顧問の忠告に従って経済を規制すること、外国との条約あるいは協定を結ぶ前に日本政府と協議することを誓約した。ポーツマス条約に続いて、1905年11月17日に日本と韓国間でもう

1つの協定⁶が結ばれた。それは韓国の対外関係を東京の外務省が管理し、指示するというものであり、ソウルの統監府に韓国皇室を代表させ、韓国の他の開港都市に駐在代表をおく権利を日本に認めたものである。この協定により、外交経験をもつアメリカ人、ダラム・ホワイト・スチーブンスが日本によってソウルの外交顧問に選任された。これらの協定にもかかわらず、韓国皇帝は1907年、ハーグの平和会議に李瑋鍾^{イ ウィジョン}、韓国人裁判官 李儁^{イ ジョン}⁸、前副首相 李相尙^{イ サンソル}⁹からなる代表団を派遣した。彼らは日本が1884年の協定に反する行為を行い、韓国の外務大臣に迫り、韓国の外交事務を日本に与える協定を強制的に調印させたと訴えた。平和全権委員は条約によって定められた国家間関係には関心をもつべきではないと理解されたので、同会議は代表団に対して何もできなかった。韓国皇帝はこの代表団を派遣した結果として、1907年7月19日に退位を迫られ、皇太子が即位した。韓国政府はこの退位に反対し、反対派は暴動を起こした。そこで日本は7月25日に別の条約¹⁰の調印を強制した。この内容は以下のごとくである。

①韓国のすべての国務を日本の統監府の手にゆだねる、②すべての法と法令の制定と重要な国事は統監府の承認を受けなければならない、③行政事務と司法事務との間には、明確な線を引くべきである、④統監府によって推薦された日本臣民が韓国政府の官吏に適任である、⑤外国人は統監府が同意する限りでのみ雇用される、⑥1904年8月22日の協定により、財政顧問の採用は中止される。

この協定にしたがって、韓国軍は1907年8月1日に解散させられた。新しい皇帝李拓は、伊藤博文統監の勧めでハーグ使節を処罰したが、これは日本への抵抗を醸成するものと疑われたからであった。韓国の日本勢力は

⁶ 第2次日韓協約。

⁷ 前ロシア駐在韓国公使館書記。

⁸ 前平理院検事。

⁹ 元議政府参賛。

¹⁰ 第三次日韓協約。

増やされ、新しい皇太子は教育のために日本に送られた。1908年にも 韓国の日本植民地化は続いた。新しい連隊が韓国に送られ、日本人の職員数は増加し、司法部では過激な改革が行われ、皇室資産は国庫に収められた。これらは韓国側の抵抗なしではすまなかった。抵抗者は集まり、ゲリラ戦が続いた。日本人職員に対する陰謀が組織され、1908年4月下旬、伊藤侯の列車を脱線させる試みが行われた。地元の新聞は日本政府に悪意をもち、政府は公安を乱す内容を含む新聞を罰金か投獄で抑圧した。1909年10月26日、伊藤侯はハルピンで撃たれて死去した。犯人の韓国人¹¹が警察で自供したところによると、彼は伊藤を暗殺するためにハルピンに来た。「私の国の仇を討つ」ためであり、伊藤が同胞の政治的自由を奪ったことがその理由であった¹²。1909年の後半、すさまじい嵐が世界中を襲い、日本沿岸では特にひどかった。11月30日に2隻の汽船が韓国沖と日本で沈没し、多くの命が失われた。満洲はすべての東方問題の妨碍の中心になった。日本は1910年1月8日、アメリカのノックス国务長官の満洲鉄道中立化計画に反対した。日本の政治家がそのような措置に完全に反対したのであった。（了）

¹¹ 安重根を指す。

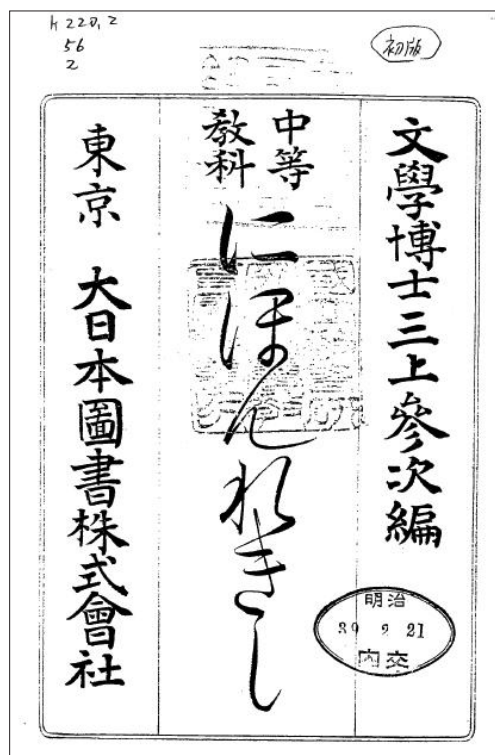
¹² この時、伊藤の鞆には朝河貫一が謹呈した『日本之禍機』が含まれていたとする説があるが、確認はできない。ただし、朝河が『日本之禍機』を出版後に即刻伊藤に謹呈したのは事実である。

解説 朝河貫一著『明治小史』について

訳者 矢吹 晋

『明治小史』のテキストについて

本訳稿は *The history of nations*, Henry Cabot Lodge, Ph. D., LL. D. editor in chief, *Japan from the Japanese government history* edited with supplementary chapters by K. Asakawa, instructor in Japanese civilization, Yale University, volume VII, illustrated, The H. W. Snow and Son Company, Chicago, 1910の第4部、すなわち朝河執筆部分の翻訳である。英語で日本史を語る史上初めての試みは、どのような経緯で実現したのか。まず、原書の出版された背景から説明しよう。米国シカゴ市でコロ



ンブスの名を冠した万国博覧会が開かれたのは、明治26年のことだ。これを契機として、米国市民に日本史の概略を紹介する計画が持ち上がり、『にほんれきし教科書』¹³としてその後、国内で出版されることになる素材が書かれた。

明治39年刊行版の初版

この間の事情を万国博の翌年に出版された『にほんれきし教科書』「緒言」はこう説明している。以下、「緒言」の全文を歴史的仮名遣いと一部の漢字を改めて掲げる。

——昨明治26〔1893〕年米国シカゴ府に於いてコロンブス世界博覧会の開設せらるるに当たり、わが臨時博覧会事務局は簡單なる本邦歴史を編みてこれを出陳し、またこれをその博覧会に關係せる各国の紳士に頒ち、以てわが国体の特異なる所以を明らかにし、わが文化の由りて來れる所を外人に示さんとの企ありき。困りてその編述を文部省に依嘱せられしが文部省はこれを文学士高津楳三郎、同三上参次、同磯田良の3人に命ぜられたり。かくてその稿成るにおよび、文学博士重野安繹、同星野恒をして校閲せしめ、ジャバンメール新聞社長カビテン・プリングリー¹⁴をしてこれを英文に翻譯せしめ、これを印刷して臨時博覧会事務局より米国に送り、博覧会に出陳せられたり。本書はすなわちその原文にして大日本圖書会社に下付せられたるものなり。

本書はもと右の目的を以て編述したるものなれども、その程度体裁等自ずから尋常師範学校、尋常中学校をはじめとし、中等教育に於ける歴史科の教科書として頗る適當せるが如し。されども初めこれを編述せし時は時日極めて切迫なりしがために、編者は時代を定めて分担

¹³ 文学博士^{しげの やすつぐ}重野安繹、文学博士^{ほしの のりし}星野恒校閱、文学士高津楳三郎、文学士三上参次、文学士^{いそだ まさる}磯田良編纂、発兌大日本圖書株式会社、明治27〔1894〕年。

¹⁴ 注3を参照。

せしにより、自ずから記事に詳略の差なきに非ず。体裁また一様ならざるところありしかば、編者は更にこれを修正したり。今回印刷したるもの、すなわちこれなり。

西洋歴史の体にならい、本邦の歴史に上世・中世・近世という類の語を用いて分割すること、近頃やや行わるといえども、編者はもとわが国の歴史はかく分かつべき性質のものは思惟せず。故に本書に於いては実権の所在政体の沿革によりてこれを3大時期に分割するの例によれり。すなわち

第1時期は天皇親政の時代とす。すなわち皇威の発達および盛運の時期にして政府と皇室と同一体なりし時代なり。すなわち国初より平安京時代の終わりに至る。されども詳細にいえば、この間にも政令全く天皇より出でし時代豪族が政権を執りし時代、あるいは政権の上皇に帰せし時代等の区別あり。されども概していえば、皇室の威力隆盛にして天皇の命令能く天下に行われたる時代なりとす。

第2時期は政権の武門に落ちたる時代なり。この時期は源氏が幕府を鎌倉に開きしに始まり、徳川氏が政権を奉還して江戸の幕府を閉じしに終わる。その間には政柄を執りたりし武家に盛衰興亡あり。また幕府の所在も変わりたれどもその施政の体制は大略封建制度にして上に皇室を戴くといえども、実際政権を執るところの氏族は、みな武家なりしなり。ゆえにこれを一括して第2時期となす。

第3時期は明治の今代なり。すなわち政権皇室に復帰せしより始まり、次いで憲法制定せられ、議会開設せられて立憲君主の政体と一変し、百般の事物その面目を新たにしたる時代なり。明治27〔1894〕年6月。著者識す――。

これは和装、袋綴本として上巻、中巻、下巻、全三巻として、明治27(1894)

年7月に出版された¹⁵。

12年後、すなわち明治39〔1906〕年2月、この三冊本は文学博士、三上参次の手により上下全二巻（上巻35銭、下巻55銭）に圧縮され、三上参次編、『中等教科 にはんれきし』として出版された。その後、版を重ねた状況は以下の通りである。

明治39年2月19日印刷、同月23日縮約初版発行。

明治39年3月14日訂正印刷、同月17日二版発行。

明治39年11月5日訂正印刷、同月8日三版発行。

明治40年1月4日訂正印刷、同月7日四版発行。

明治44年12月23日訂正印刷、同月26日五版発行。

縮約三版の「緒言」を三上参次はこう記している。

——いぬる明治26〔1883〕年、米国シカゴ市に於いて、万国大博覧会の編纂を文部省に依嘱せられ、文部省は、これを学友磯田、高津の両学士および余に命ぜられぬ。さて稿成るにおよび、これを英文に翻訳して該博覧会に出陳し、また外国の諸貴紳に頒たれたり。次いで、大日本図書株式会社は、文部省に、その草稿の下付を乞い、『にはんれきし教科書』と題して、これを出版せしが、ひろく諸学校に採用せられぬ。もと簡略なるものなれども、中等教科の用書としては、なお浩瀚に過ぐるの嫌いあり。されば、会社は、余にこれを縮約せんことを求め、余のこれを承諾せしは、10年の以前にあり。然るに、その後、余は公務多忙のゆえを以て、訂正縮約の暇を得ざりしが、日露戦を交うるにおよび、わが将校下士卒の忠勇義烈なるを見て、深く感ずるところあり。将来、普通教育における国史の、いよいよ重要なるべきを考え、すなわち筆を執りて綴りたるものを、この小冊子となす。その

¹⁵ 所蔵図書館は大阪市大中央図書館＝中巻、下巻のみ、筑波大学図書館＝全三巻、東大史料編纂所＝全三巻、東大図書館＝上巻、下巻のみ。徳島大学図書館＝全三巻。福教大図書館＝上巻のみ。

程度分量等は、もとより、文部省の中等学校教授要目に拠るといっても、教育に経験ある諸友の説を参酌し、また私に見る所を加えて、特に注意せる力条は左のごとし。

①古に簡略にして、今に近づくに従い、やや詳密の度を加うべきの必要により、1年級用には、平氏の滅亡までを包含せしめたり¹⁶。②忠君愛国の情操（に富める、善良なる国民を、訂正5版で補足）を養成するの点においては、特に注意する所あり。ただし、これに関する記事も、なるべく科学的研究の結果と背馳せざるをつとめたり。③韓国は、すでにわが保護に属し¹⁷、わが列国との交渉、また益々繁多ならんとす。故に本書は、比較的に対外関係の記事を多くせり。④わが国民¹⁸、概して年代の觀念に疎なり。故に本書は大事件の条下には、明治40年¹⁹より起算して何百何十年前と分注せり。⑤人名、事件名等の、やや読みがたきものには、発音通りに、傍訓を施すの必要を認めたるにより、傍訓は必ずしも、従来の仮名遣いに従わず。挿画類は、多くは、東京帝国大学文科大学史料編纂掛に蒐集せるものに拠れり。ここに特記して感謝の意を表す。明治39〔1906〕年9月 編者〔三上参次〕志るす]

縮約三版の所蔵は東京書籍株式会社付設教科書図書館「東書文庫」であり、同「東書文庫」には、訂正五版、「緒言」日付は明治44年12月、明治44年12月発行も収められている。こうして文部省が重野・星野に託した『にはんれきし』は、日露戦争後の1906年に装いを新たに三上参次編『にはんれきし教科書』として、版を重ねた²⁰。

¹⁶ 今年公布の中学校の要目も、またこの趣旨に拠られたりと見ゆ。訂正五版で補足。

¹⁷ 韓国すでに我に併合せられ、南満洲、我が勢力圏内にあり。訂正五版で補足。

¹⁸ 訂正五版は「国民」。

¹⁹ 訂正五版では45年。

²⁰ 上記の書誌資料はすべてライブラリアン故高橋光夫（元東大史料編纂所図書

では、その英語版の運命はどうであったか。1893年、シカゴで万国博覧会が開かれた機会に「シカゴ万国博覧会日本帝国委員会」のもとに、高津鋤三郎、三上参次、磯田良らによって編集され、文部省が東京で出版したものが①である。①*History of the empire of Japan*, edited by Dept. of Education, Japan, 1893。これはプリンクリー²¹によって再編集され、次の②となった。②*Japan: Its history, arts and literature*. new edition by G. Brinkley. J. B. Millet Co. Boston, 1904, 1905.

朝河はプリンクリーの求めに応じて本書に明治期の経済発展を分析した二つの新しい章を付加した。その内容は③の第18章と同じものである。日露戦争以後、日本への関心はいよいよ高まり、文部省版教科書は「諸国民の歴史」シリーズに収められた。③*Japan, with supplementary chapters. History of nations*, vol. 7. rev. ed. by Henry Cabot Lodge. J. D. Morris and Company, Philadelphia, 1907. and 1910. The H. W. Snow and Son Company, Chicago, 1910。朝河はロッジが①を再編集した際に、第4部全6章を付加した。本訳稿『朝河の明治小史』のタイトルで翻訳した原テキストは、この第4部全6章である。これは朝河版・明治小史の全訳になる。

朝河とジョージ・H・ブレイクスリー「米国国際関係論の父」の交遊について²²

ジョージ・ハバード・ブレイクスリー（George Hubbard Blakeslee、1871～1954）は、アメリカのクラーク大学の歴史と国際関係論の教授であり、長年にわたって学長も務めた。ブレイクスリーはニューヨーク州ジェネッセオに生まれた。ウェズリアン大学で学士と修士の学位を取得した

整理掛長、図書運用掛長）の調査に基づくものである。専門家の知識を活かした同氏の努力なくしては、この1節を執筆できなかった。記して謝意を表する。

²¹ 前掲注3を参照。

²² この項は「朝河貫一の人脈」（『尖閣衝突は沖縄返還に始まる』花伝社、2013年、179～185頁の抄録である。

後、1901年から1903年までライプツィヒ大学とオックスフォード大学に留学し、1903年にハーバード大学から博士号を授与された。ブレイクスリーは1903年からクラーク大学で教鞭をとるようになり、1943年に退職するまでその職にあった。1910年には『人種開発ジャーナル』(*Journal Race Development*)を創刊した。この誌名は「優生学的」用語ではあるが、実際には国際関係論に関するアメリカ初の学術雑誌として高く評価されている²³。

ブレイクスリーはまた、さまざまな国際会議や組織でも活躍したことで知られる。1921年のワシントン会議、1925年以來の太平洋問題調査会、1931～32年の満洲問題に関わるリットン調査団に参加し、1941年には国務省の対外政策諮問委員会の極東班の責任者となった。これは対日占領政策を構想する組織で、途中いくつか名称を変えたが、第二次世界大戦後の極東委員会に続いている。ブレイクスリーは1954年にマサチューセッツ州ウースターで死去した。

ブレイクスリーの著作は少なくないが²⁴、ここで特筆しておきたいのは、

²³ たとえば Vitals, Robert (2005), *Imperialism and internationalism in the discipline of international relations*, ed. by David Long, State University of New York Press.

²⁴ ① *China and the far east: Clark University lectures*/ edited by George H. Blakeslee, New York Thomas Y. Crowell, 1910. ② *Japan and Japanese-American relations: Clark University addresses*/ edited by George H. Blakeslee, New York: C. E. Stechert, 1912. ③ *Recent developments in China: Clark University addresses*, November, 1912/ edited by George H. Blakeslee, New York: G. E. Stechert, 1913. ④ *Latin America: Clark University addresses*, November, 1913/ edited by George H. Blakeslee, New York: G. E. Stechert, 1914. ⑤ *The problems and lessons of the war: Clark University addresses*, December 16, 17, and 18, 1915/ edited by George H. Blakeslee; with a foreword by G. Stanley Hall, New York: G. P. Putnam, 1916. ⑥ *Mexico and the Caribbean: Clark University addresses*/ edited by George H. Blakeslee, New York: G. E. Stechert, 1920. ⑦ *The recent foreign policy of the United States: problems in American cooperation with other powers*, by George H. Blakeslee,

『中国と極東——クラーク大学講演録』²⁵である。というのは、同書は、「中国と極東」を主題とするクラーク大学シンポジウムの記録であり、このシンポジウムに朝河貫一が招かれて講演しているからだ。このシンポジウムはポーツマス会議の4年後、すなわち1909年9月13日～19日にアメリカ東部の名門クラーク大学が創立20周年記念のために開いたもので、米国内外の権威者たちが招かれた。日露戦争の前夜、英文『日露紛争——その原因と争点』（*The Russo-Japanese Conflict: Its Causes and Issues*）を書いて、日露戦争の原因を明快に分析して令名をはせた朝河貫一は招かれて、「日本の対中国関係」²⁶と題して報告した。朝河自身による日本語要約が「クラーク大学講義大会に発表せられたる米国人の清国及日本に対する態度に注意せよ」と題したアメリカ通信にはかならない。このシンポジウムには駐米大使、高平小五郎も招かれていたが、欠席した。欠席の理由として高平は「中国側の画策」や「米国側の思惑」を付度している。この会議の欠席により、日本はせっかくの対外広報の機会を逸したこと、米国の対日世論の急転換のなかで、日本外交はなすすべを失うに至る最初の契機がこのシンポジウムにあると見てよいことについては、かつて訳者は「近代日本外交

New York: Abingdon Press, c1925.（米国最近の外交政策、ブレイクスリー著、浅見数男訳、国際聯盟協会、1929年10月）^⑧ *The pacific-area: An international survey*, by George H. Blakeslee, Boston: World Peace Foundation, 1929. ^⑨ *Interpretations of American foreign policy/ Quincy Wright, editor*, Chicago: University of Chicago Press, 1930. ^⑩ *Japan in American public opinion/ by Eleanor Tupper and George E. McReynolds; introduction by George H. Blakeslee*, New York: Macmillan, 1937. ^⑪ *Essays in history and international relations: In honor of George Hubbard Blakeslee/ edited by Dwight E. Lee and George E. McReynolds*, Worcester, Mass.: Clark University Publication, 1949. ^⑫ *A study in international cooperation: 1945 to 1952/ George H. Blakeslee* 1994. ^⑬ *A study in international cooperation: 1945 to 1952/ George H. Blakeslee*.（解説・山極晃、1994年、現代史研究叢書）

²⁵ *China and the far east*. Clark University lectures, Edited by George H. Blakeslee, New York: Thomas Y. Crowell, 1910.

²⁶ 日本語要約は『実業之日本』第12巻、第25号、1909年12月1日。

の禍機——クラーク大学シンポジウムにおける朝河貫一報告を読む」で論じた²⁷。

ブレイクスリーは、創立20周年のクラーク大学でアメリカで大きな話題となりつつある極東問題を国際関係論の分野から取り組もうとしていた。そこへあたかも盟友として登場したのが、『大化改新』でイェール大学で学位をとり、『日露紛争』を書いて学界に登場したばかりの朝河貫一であった。

ブレイクスリーは当時38歳、朝河は36歳。同世代の二人は、東アジアの国際情勢に対する問題意識と学問的友情で結ばれることになる。朝河はシンポジウムから2年後の1911年11月、再度クラーク大学に招かれて「近代日本が封建日本に負うもの」²⁸と題した講演を行った。朝河はこの講演で明治維新以降の近代日本の勃興を支えた封建日本の貢献を透徹した歴史観に基づいて分析し、特に天皇制に言及して「天皇制に言及することなしに封建日本の近代日本への貢献を語るのは、画竜点睛を欠く」と論じて注目された。この主権解釈が後に「天皇制民主主義」として、昭和憲法に結実した²⁹。

歴史家・三上参次と朝河貫一の交遊関係について

三上参次は1865年生まれであり、朝河より8歳年上である。1939年に74歳で死去した。東京帝国大学文科大学史料編纂掛事務主任などを経て1900年4月～1919年7月には帝大史料編纂所長相当を務めた。阿部善雄『最後の日本人』は、朝河と三上の交遊をこう描いている。1906年の最初の帰国の際、朝河は東大史料編纂所に通って、東大の歴史学者たちと交わったが、

²⁷ 『横浜市立大学論叢』人文科学系列、第53巻第1・2合併号、2002年3月。

²⁸ K. Asakawa, Some of the contributions of feudal Japan to the new Japan, *The Journal of Race Development*, Vol. 3, No. 1, July 1912. 矢吹晋訳『比較封建制論集』柏書房、2007年、所収。

²⁹ 朝河貫一の学識から日本史を深く学んだヒュー・ボートン（1903-1995）については、『失関衝突は沖縄返還に始まる』185～188頁で書いた。

そのなかに三上がいた³⁰。朝河はイエール大学図書館およびアメリカ議会図書館のために、それぞれ洋風製本で3,578巻（2万余冊）、9,072巻（4.5万冊）を収集したが、この際、三上参次は史料編纂所長として積極的に協力した。『朝河貫一書簡集』には三上宛書簡が3通収められている。すなわち一信（1912年1月20日）、二信（1912年3月24日）、三信（1916年10月15日）である。一信は、^{せいじん}正閏問題および井伊問題についてのコメントである。

正閏問題とは、1911年の尋常小学校用の国史の国定教科書改訂にさいして南北朝を対等に記述したことが帝国議会で問題とされ、執筆者の喜田貞吉が解任され、主査の三上も辞任した事件である。宮内省では従来、北朝を正統としていたが、第二次桂内閣の上奏により、天皇は南朝を正統とし、北朝歴代の祭祀は従来通りと決まった。三上はその苦衷を朝河に訴えた。これに対して朝河は「日本学界のために嘆息し、御苦衷のほど御推察申し上げ候。此事に限らず日本にては未だ事物の真を語るを憚る趣相見え、嘆息此事に候。いずれの国にもかくのごとき事情なきにあらず候ても、日本はいわゆる文明国中最もこれが多き様に存じ候。殊にその国体および政治に関する部に最も慎重の態度も徐々に真を現わさざるべからず、真ならざることは決して永久なる能わざること、史の証するところに候えば、いつまでも真を蔽わんとするは、急劇の破裂を招くゆえんにして国の為にも忠なるものと言ふべからず、史学の国体および政治に関する方面につきて識者の献身的忠誠を要する時と存じ候」、「私ら海外に在つて日本の史を論著するものは（材料の乏しきてう不便あるとともに）、日本の旧思想等に掣肘せられざる利便あるを感じ候。欧文に書き候事は少しも日本諸学者の注意を引かず、なんらの手応えもこれなきは呆るる所に候えども、世の識者（欧米）の参考に供し得候。日本よりも欧米の学者に注目せられ比較史学の資材となるを得候」「世の識者に訴うるにおいては、自然に（細事を論ずるにも）、広大の着眼点より論ぜざるべからず。日本読者のみの独り合点の

³⁰ 阿部著96頁。

見地を離れて、人類社会発達の法式という見地よりせざるべからず、これ論著の性質より来る一良結果に候。従いてまた日本にて他人の研究せるところを焼き直して欧文にて書くごときことをなさずとも、根本材料につきて右のごとき見地より研究して日本にては得るに難かるべき新鮮の結果を得ることなきにあらざるべく存じ候」。

傍点部には、朝河の考え方がよく示されている。①国体および政治に関する部分において、いつまでも真実を隠蔽し続けることはできない。②朝河が海外で欧文で日本史を書く場合に、旧思想の制約を受けないのは有利な条件だが、日本からの手応えはない。しかし、欧米の学者にとって比較史学の素材になる。③論点は、日本の独り合点ではなく、人類社会発達の法式（方式）という普遍性に着目するものたるべきだ。朝河は①で三上を慰め、②で日本学界に対する自らの不満を述べつつも、欧米学者の反応に満足を見出し、③では学問の本質的課題を「人類発達の方式の見地」に求めている。いわば8歳年長の失意の三上を慰めつつ、みずからの史学方法論を語ったものである³¹。

朝河の二信は、一信の2カ月後、すなわち1912年4月21日発である。これは史料編纂における日米協力についての具体的な提案である。

「近頃大日本古文書の幕末外交文書を見居り候間に、前年以來胸中に從來より左の思想一層深く印象せられ候。ペリリ³²およびハリスに関する日米間外交文書の米国側のものは、既に出版せる公文書の外に未だ出でざるもの多かるべきことは専念私が推察したるところに候。これワシントン政府に蔵しあるならん。前世紀の五十および六十年代の秘密文書は今日すでに研究者に見せ候や否や不明に候えども、支那に関する同時代の秘密文書の例より推す時は、イエール大学または日本政府のごとき筋より紹介請求あらば日本のをも見せ候ならんと存じ候」、「貴史料編纂所にては、幕末の

³¹ なお、正閏問題当時の三上と朝河の往来は阿部善雄『最後の日本人』76頁に詳しい。

³² 矢吹晋『対米従属の原点 ペリーの白旗』花伝社、2015年で詳述した。

米国側の文書をも悉く出版せらるべき御計画に候哉。またこれが実行法を定められ候や。もし御計画のみありて未だ実行法を立てられず候わば、事情によりては私がその任に当たりてもよろしく候。ただし、右は数年来日本近世に関する米と英との外交文書を夥しく読み馴れ候ために申し出で候ものにて、これは教授上の参考とせしものにて、私の専ら研究せる方面にあらず、ゆえに右の提供は私の切望するところにはあらず候。また左の如き条件が用いられず候わば、私は却って御断り申し上げたく候。すなわちこれに対する私の報酬はいらず候えども、ワシントンへの私の往来および滞在の旅費、およびタイプライター写字生の実費を御支払い下さるべきこと、また右材料を大日本古文書の中に出版せらるる時は、これが編纂を私が致し候ことの他人に分かるように例言にてなりとも明示せられたきこと（すべて私の履歴に加うべき credit を得がたきことに従事する余暇実際にこれなく候）。右の条件相立候わば、余暇を得て、米政府蔵書に就き編纂し、これを写さしめ、これを校正し、さらに日本にて印刷のうへは校正いたすべく候」「右の提供は、私の本業以外、専門以外に候間、切望するところにあらず、またかの条件を離れては致しがたく候。また貴所にて右の如き出版計画なきにおいては全く話しにならぬことに候間、その節は茶話として御一笑下されたく候」。

朝河の提案に対して三上がどのような返信を書いたのかは、不明である。いずれにせよ、この提案は実現しなかった。三上宛三信は4年後、1916年10月15日発である。「このたび来年六月より向こう一年余の休暇を与えられ、日本に帰り専らこの方面の研究を致すことを許され候につき、これにつき今より御高見を伺いて在邦中の方針を定めたく候」「主として調査致したきは、武士が庄園³³に入り込みたる有り様（鎌倉の地頭制以前がこの問題の要点に候）、および武士の手に入りて後、庄園が性質を変じつつ、行き有り様（戦国までにおよぶ）の2にあり候。これと連なりて種々の難題あり、

³³ 朝河は「庄園」と表記した。

ことに作人の事、所当課役のこと、等は最も不明に候」「右の目的にて一ヶ年専ら研究致さんとせば、いかなる方法が最良なるべきやに候。ほとんど全く文書の研究なるべきはもちろんに候（日本に在らざれば見られぬ文書）。さらば、右の問題に最も必要なる文書類はいずこに最も多く候や。定めて貴編纂掛にも多かるべく、この点ことに詳細拝承いたしたく候。すなわち、もし高野山、東寺、醍醐、高雄等の寺院文書が最も豊富にて最も有益なりとせば、これらは閲覧致し得る様に各寺院にて整理致しおり候や」。

この2回目の帰朝で、朝河は真っ先に三上を訪問し、挨拶している。研究生生活のスタートはやはり史料編纂所であり、まず「東寺百合文書」と「東大寺文書」を調べ、後者の4,000通にのぼる文書の目録を完成させている³⁴。帰朝1年後の1918年7月関西へ旅立ち、19日から東大寺文書などの調査を行った。翌19年6月4日に入来村・伊集院村を訪ね、ひとまず鹿児島に戻った。6月8日、入来村を再度訪れ、16日、村を出た。このわずか9日間に超人的スピードで『入来文書』を筆写し、それが10年後に*The Documents of Iriki*として結実したことは、あまりにも伝説的な事実である。朝河は滞日中世話になった三上に英文の『エブリマンス・ライブラリー』二十五巻を贈って感謝の意を示し、9月13日横浜港を出て26日にシアトルに着き、鉄道で東行し、10月2日ニューヘブンに着いた。これ以後、朝河が母国の土を踏むことはなかった³⁵。

(2018.12.19. 攔筆)

³⁴ 阿部、102頁。

³⁵ 阿部、110頁。